

テーマ：教育現場における動画・映像の利用

日 時：2011 年 11 月 27 日(日) 13:30 - 17:00

会 場：大阪電気通信大学 駅前学舎 1F 多目的ホール

参加者：23 名



今回の研究会は、映像の利用に着目し、単なる講義映像の提供などにはとどまらない活用方法や協調学習を行うための仕組みについて考える目的で設定された。

また、本研究会は、教育システム情報学会 (Jsise) 関西支部との共催によって行われ、研究委員会としては、一昨年に行った第 86 回研究会 (テーマ：情報フルーエンスィーで考える情報教育) に続き、2 回目の試みである。

[ 講演 1 ] 映画で英語を磨く自習学習プロジェクトにおける moodle 活用のためのポイント

講師 大倉 孝昭 氏 (大阪大谷大学)

「映画で英語を磨く自習学習プロジェクトにおける moodle 活用のためのポイント」とのテーマで報告された大阪大谷大学の 大倉孝昭氏からは、moodle 上のコースウェアとして Web-CALL を提供し、自主学習で効果的に運用することを目指して実践を行った結果から、タスクの量、学習目標の設定、教師の支援などに関する多くの知見と様々な問題点を見出すことができたとのことであった。



今回、報告された内容に関する研究は、英語映画を楽しむことで、自主的な学習を促進させ、英語での具体的な言語活動や生活領域で機能する英語を身に付けることを目的として行ったものである。

研究の背景として、「クローズドキャプション(CC)付きの番組は、学習者の学びの動機づけを促進する (Goldman and Goldman,1988)」や「DVD 映画は、教育的に幅広いオプションを提供し、本質的に学習者をやる気にさせるリッチな素材を提供する (King J.,2002)」、「字幕付き映画 DVD によって目標言語の文化知識を同時に学ぶことができる (Kusumarasdyati,2007)」があり、単に映画を見るだけでなく字幕を活用することを念頭に研究されたとのことであった。

映画の字幕を言語コミュニケーションの教育に活用することで学習効果があるとしても、従来は、映画を繰り返し見ながら聞き取りを行い、空所を補充するなどの課題に取り組むことは、CALL 教室以外では非常に困難であるため、映画の DVD を学習者が 1 枚ずつ所持しつつ、個別に学習する Excel ベースのシステム (CaptionMaster) を開発したとのこと。学習者が DVD を 1 枚ずつ所持することで、著作権に対する問題もなくなり、映画を用いての個別学習が可能となり、さらに映画 DVD を用いた英語教育の開発・実践の研究を続けられ、その成果は、「映画 DVD を活用した英語学習支援システムの開発と実践」として、日本教育工学会第 23 回全国大会講演論文集にまとめられているとのこと。

具体的には、私立大学の英語を専門としない文科系学部の学生 25 名に映画として、ストーリーの展開がわか

りやすい、感動が共有できる、自然な日常会話で構成されている、スラングや暴力シーンが少ないなどの理由で「Toy Story」を選択し、その映画を見ながら、一覧表示されている字幕データをクリックすることで、映画内の音声が入っている時間を特定する作業を自主学习で行った結果、「映画DVDとパソコンを使う授業はおもしろかった」「授業内でもっとたくさんの映画を使って勉強したかった」とプラス評価が多く、英語学習に対する動機付けになると考えられるものの、映画を1本鑑賞する本方法のみではリスニング能力が向上したとは言えないとのことであった。

その後、学習者用ページでは、教室モードと自習モードを設定値によって識別するようにし、教室モードでは字幕のON・OFF、音声言語の切り替え、特定チャプターだけの限定再生などを許可できるなどの改良を加えた。この仕組みをWeb-CALLシステムとしてWeb上に構築し、いつでもどこでも学習が可能となるよう放送大学内のMoodleサーバにコースとして設置しアカウントを設定したとのこと。このWeb-CALLを用いて、2大学の英文科や英米語学科の学生15名前後のクラスにおいて授業を行った結果、DVD映画を用いたCALLシステムがWeb経由で利用可能となり、教授目的で学習者の学習環境を制御でき、授業評価としてもプラス評価が得られたが、PCに対するシステムのアドインやフィルター類のインストールが必要なこと、学習に慣れるための時間が必要なこと、そのために支援者が必要であることなどの問題点が浮かび上がったとのことであった。

そして、さらにその後、本Web-CALLシステムを自主学习で利用する取り組みを行った結果、自主学习を続けさせるためには、動機付けを持続する仕組みが必要であること、教員、TA、SAなどの支援が必要であること、定期的な励ましや成果発表の目標の設定、自習プログラムの前に映画全体を鑑賞する時間を設定すること、学習は10分程度の短いものを積み上げる方法とすることなどの知見が得られたとのことであった。これら報告の後、映画内のセリフの入手方法や作成方法についての問題、モチベーションを維持させる方法、学習意欲の湧き出る映画の選択などについての質疑応答が行われた。

## 【講演2】 自学自修ソーシャルラーニングシステム「学びあい」の構築

講師 吉田 賢史 氏 (早稲田大学高等学院)

続いて、「自学自修ソーシャルラーニングシステム「学びあい」の構築」とのテーマで報告された早稲田大学高等学院の吉田賢史氏からは、学習者自身がコンテンツを作成する学習形態で学びあえる学習システムの紹介だけでなく、実際の学習者の反応について報告され、学習者の思考スタイルや行動スタイルについての新しい考え方を得ることができた。

吉田氏はこれまで、主として、数学教育や情報教育を担当され、コンピュータを用いた実験的数学あるいは発見的学習などの体験や試行錯誤を取り入れた学習に関する取り組みを行ってきたとのこと、しかし、体験や発見による学習だけでは対応できない場合も多く、「わかるということ」や「説明している言葉が伝わる」とは具体的に何かを考える中で、同じ内容を同じ表現で伝えた場合にも、伝わる場合と伝わらない場合があることなどから、人の思考特性を考慮しながら研究し、授業を展開している。



そして、新学習指導要領においても、論理や思考などの知的活動やコミュニケーションの基盤である言語が重視され、言語活動を指導上位置付けることが求められている中で、T2V (Text to Vision) Playerを用いて学習内容の解説コンテンツを作成させるなどの手法を用いた。T2Vは、テキストを映像に変換する技術で、映像の台本を番組制作のためにテキストベースで行う言語 (TV program Making Language) を用意することで、T2VPlayerがインストールされたパソコンでこれを読み取り、コンピュータグラフィックス(CG)や音声合成技術により、映像を作り出すことができるツールであり、その開発キットやプレイヤーは、<http://t2vlab.jp/>で配布さ

れているフリーウェアである。

学習者が、学習すべき内容をセリフとして、できるだけ正確に言語化して、番組制作を行い、その番組を視聴し、第3者の立場として見ることで、その内容を的確に伝えることができたかどうかを考えフィードバックする活動を繰り返すことができる。しかし、このような活動を行っても、学習内容を適切に伝えられない事もあり、思考特性の影響を考慮するようになったとのこと。思考特性の一つの例として、伝え方の「クセ」がある。発表時に作成されるスライドに、図を多用する方もいれば、文字中心の方もいる。

この特性を調べる方法の一つとして、学習者の思考スタイル分析手法 STEP(Student/Teacher Emergenetics Profile)がある。これは、米国教育学会 (AERA)、米国心理学会 (APA)、全米教育測定評議会 (NCME) の3団体によって作成された「The Standards for Educational and Psychological Testing」から認定を受けたプロファイリング手法で、左脳型と右脳型および、具象思考と抽象思考の組み合わせによって大きく4つの思考スタイル (分析型・ディテール型・社交型・コンセプト型) に分類できる。

実際に、数学の授業において、左脳型の生徒の場合、既習の内容・法則を適用して矛盾無く進める授業方法による説明が理解しやすく、右脳型の生徒の場合には、直感的に理解してもらいやすいようにイメージ化して説明する必要がある。

また、前述のように「言語活動の充実」が教育内容の改善事項として重視され、意見交換などのグループ活動を授業の中心に据えた授業を展開されることも多いが、議論が活性化しない場合も多々ある。毎回の授業に議論などを行い、慣れさせることで、身に付くという考え方もあるが、STEPの行動スタイルによると、自己表現性、自己主張性、柔軟性の3つの指標があり、議論が好きな生徒、意見があるが、議論は苦手な生徒もいることになる。行動のスタイルもある程度の訓練によって身に付けることは可能かもしれないが、そのことが逆にストレスになり学習嫌いになる危険性も考えられる。

実際の学校現場などでは、様々に異なる思考スタイルや行動スタイルの生徒が存在し、たとえば、左脳型と右脳型の中間的思考で、いずれの考え方も受け入れることができる場合もある。そこで、様々な思考特性の生徒が、T2VPlayerによるコンテンツ作成とそのコンテンツ内容を互いに共有し、コメントしあうことによって自ら気づいていくことのできる機能を有する学習コミュニティサイト「学びあい」を構築し、現在、授業時間外に、この仕組みを用いて生徒に1つのテーマについて3分から5分程度で解説する番組を作成させ、コメントをさせているとのこと。報告の後、思考特性の典型的なパターンについて、SNSやTwitterによる教授者と学習者を超えるつながりによる学習、「学びあい」に関する内容などについての質疑応答が行われた。

(鳥居 隆司 椋山女学園大学)